

【静岡市】地域の魅力を高める公共建築技術者のしごと ～人が集い交流する公共建築物～

公共建築物の役割

公共建築物として接する多くは、地域の人々が日常生活の中で利用する学校や生涯学習施設、庁舎、体育館などです。そうした施設は、主に機能や効率、コストが重視されます。一方で、地域外の人も集め、交流し、非日常を楽しむ場となることを目的とした公共建築物もあります。こうした施設は、機能・効率のみならず、その地域・場所がもともと持っている魅力を発信するとともに、人を魅了し集わせる魅力が求められ、公共建築技術者にも普段の公共建築物とは違う配慮が求められます。静岡市では、富士山が2013年に「富士山～信仰の対象と芸術の源泉～」として世界文化遺産に登録されたことを機に、2つの公共建築物を整備しました。日本平、三保松原という景勝地として、もともと名高い地域の魅力をより高め、発信するための場となっています。

日本平公園 展望回廊

日本平山頂部は、世界文化遺産「富士山」をはじめ、360度の優れた眺望が可能な日本を代表する景勝地であり、文化財保護法に基づく名勝地の指定を受けた地域になります。さらに、山頂からロープウェイで結ばれた久能山東照宮の国宝認定等により、日本平への観光交流客数の増加が見込まれたことから、静岡県と共に、来訪者をおもてなしする環境を整え、日本平の価値や魅力を発信するため、日本平山頂部に展望施設「日本平夢テラス」を整備しました。

本施設は、日本平の気候や風土に根ざし、人と人が繋がりを生み出す施設として「富士を結ぶ木組みの架け橋」をコンセプトに設計し、日本平の歴史や文化を展示・発信する「シンボル施設（延床面積964.7㎡ 鉄骨造3階建）」と360度開かれた裏のない八角形の眺望と来訪者の回遊性を生み出す「展望回廊（延床面積862.84㎡ 鉄骨造平屋建）」で構成しています。

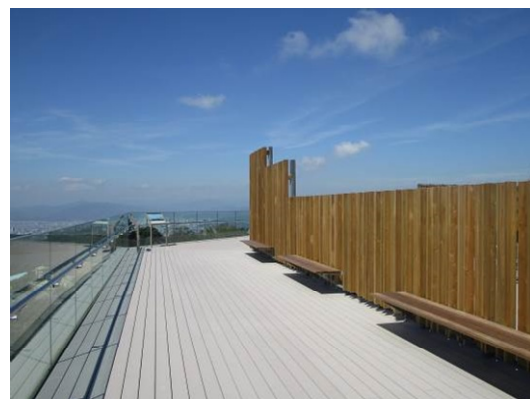
本市が整備した「展望回廊」は、幅員4.6m、一辺が約25m総長172.8mの八角形の回廊で、既存展望場所「吟望台」と「シンボル施設」を繋ぎ、建築とランドスケープを繋ぐ中間領域となるよう計画されました。ブリッジ架構の木組みやベンチ、木製



展望回廊の軒裏は、来訪者が下から見上げられる関係にあるため、木架構を用い鉄骨が隠れる森のような軒下空間を演出するとともに、大工が加工する在来工法の継手、仕口ではなく、新工法である「ホームコネクター（接合すべき木材に穴をあけ、接合金物を挿入し、木材とホームコネクター間の隙間を接着剤で充填することにより、接合する技術）工法」で施工することにより、金物が露出しない木組み本来の美しさを表現しました。

デッキ上は、内周部に既存公共放送電波塔（以下「電波塔」という。）の目隠しルーバーを設置し、電波塔の近接部は高く、東方は低くなるよう場所によって高さが異なる立面計画とし、3種類の部材断面のルーバー材の向きを変えて設置することで、単調になるのを避け、空間にリズムをつけています。また、外周部には、景観を遮ることのないガラス手摺を採用し、方位ごとに見える風景や歴史を解説するサインージと休憩用ベンチを設けることで、静岡市と日本平の魅力を発信する場としています。当初、「日本平夢テラス」の来館者は年間30万人と想定していましたが、2018年オープン後、初年度には118万人の来館者が訪れ、賑わいをみせています。

デッキ上は、内周部に既存公共放送電波塔（以下「電波塔」という。）の目隠しルーバーを設置し、電波塔の近接部は高く、東方は低くなるよう場所によって高さが異なる立面計画とし、3種類の部材断面のルーバー材の向きを変えて設置することで、単調になるのを避け、空間にリズムをつけています。また、外周部には、景観を遮ることのないガラス手摺を採用し、方位ごとに見える風景や歴史を解説するサインージと休憩用ベンチを設けることで、静岡市と日本平の魅力を発信する場としています。当初、「日本平夢テラス」の来館者は年間30万人と想定していましたが、2018年オープン後、初年度には118万人の来館者が訪れ、賑わいをみせています。



デッキ上：内周部に市産材を利用した目隠しルーバー、外周部はガラス手摺を設置



静岡市三保松原文化創造センター みほしるべ

三保松原は、その美しさから日本で最初の「名勝」に指定され、日本新三景、日本三大松原の一つに数えられ、歌川広重の浮世絵や数々の絵画・和歌に表現されてきました。2013年に世界文化遺産「富士山」の構成資産としても登録されたことで全国的にも注目を集め、観光客も急速に増加しました。こうした来訪者を迎え入れ、三保松原の持つ美しい松林や富士山の眺望などの景観のみならず、浮世絵や和歌など様々な芸術作品に描かれ、詠まれてきた文化的価値、地域の人々とこれまで取り組んできた松原の保全を来訪者に伝えるため、『静岡市三保松原文化創造センター みほしるべ（以下「みほしるべ」という。）』を整備しました。



通り土間内観

みほしるべは「神の道」と呼ばれる御穂神社から「羽衣の松」につながる参道間に45度傾けた位置に配置することで、「神の道」、「羽衣の松」、「松原」を繋ぐ回遊性と三角形に広がる広場を生んでいます。建物内には、松林を散策した後に休憩できるくつろぎの場（通り土間）を配置しています。通り土間を覆う南側ファサードはガラスのカーテンウォールを用いて、力骨を木製にするとともに通り土間の内装を木質化しています。通り土間の内部空間部分は約24mの長さがあり、それ一面を平坦な壁面とすると、休憩場所の雰囲気としてはスケールオーバーな空間となるため、それを解消するため、木製の棧を565mmピッチで設置しています。また、ファサードのガラスは向かいの松原を写し、広場に立つと建物が消え、松原の中にいるような錯覚を覚え、建物の中からはどこにいても窓の外に松原の眺めが楽しめます。

三保松原の玄関口の施設として、三保松原の価値や魅力の情報発信と松原の保全活動の拠点として、その大切さを分かりやすくガイダンスし、後世に継承する役割を担い、来訪者と地元住民との交流を通じ、三保松原で新しい文化の創造につながるような活動を行っていく未来志向の施設を目指しています。

公共建築技術者として

【日本平展望回廊 担当監督員：木股嘉則】

観光施設では、その地域固有の文化・歴史など、この地ならではの世界観を来訪者に感じてもらうことが重要となりますが、日本平夢テラスは、「日本平＝風景美術館」を基本理念とし、悠久の時を経て変わらぬ風景と、365日24時間を通して様々な姿を見せる富士山に代表される四囲の風景をどのように来訪者に感じてもらい、ここでしか味わえない感動を与えられるかがテーマでした。

市公共建築技術者をはじめとした事業関係者は、より良質な空間形成を生み出すため、現地の現状・資源・課題を整理しました。敷地の様々な地点から本施設がどのように見えるのか、また標高約300mの丘陵地に位置する本施設からは、どこを見渡しても四季折々の風景を感じることができているのかを確認しました。そして、公共建築技術者としては、設計者と共にこの「地域の特性」を設計施工に反映させていきました。この結果、日本平夢テラスは、多くの方々のくつろぎの場となり、四囲の優れた眺望をいつでも味わうことができる施設となりました。

今回の経験から、観光施設の設計施工は、事業関係者全員が「地域の特性」の固有性を把握したうえで、利用者に寄り添った「その地域らしい」魅力を最大限表現した施設とすることが重要と感じました。

最後に、この施設開設に向け、ご尽力いただいた多くの関係者の方に感謝するとともに、公共建築の設計施工に携わる市の公共建築技術者として、ここで培った技術や経験を活かし、今後の設計施工にも還元できればと感じています。

